

あなたがたは喜びながら救いの泉から水を汲む

「イザヤ書」からの説教 (No.2)

【聖書箇所】 12章1節～6節

- 12:1 その日、あなたは言おう。
「【主】よ。感謝します。あなたは、私を怒られたのに、
あなたの怒りは去り、私を慰めてくださいました。」
- 12:2 見よ。神は私の救い。私は信頼して恐れることはない。
ヤハ、【主】は、私の力、私のほめ歌。私のために救いとなられた。
- 12:3 あなたがたは喜びながら救いの泉から水を汲む。
- 12:4 その日、あなたがたは言う。
「主に感謝せよ。その御名を呼び求めよ。
そのみわざを、国々の民の中に知らせよ。
御名があがめられていることを語り告げよ。」
- 12:5 【主】をほめ歌え。
主はすばらしいことをされた。これを、全世界に知らせよ。
- 12:6 シオンに住む者。大声をあげて、喜び歌え。
イスラエルの聖なる方は、あなたの中におられる、大いなる方。」

ベレーシート

●「マイム・マイム」というフォークダンスがあります。私は小学生、中学生の時に踊った記憶がありますが、これはイスラエルのフォークダンスです。一つの輪を作り、「グレーブ・バイン」(ぶどうのつる)というイスラエル特有のステップで踊りながら、中心に向かう動きの中で「マイ(ム)・マイ(ム)・マイ(ム)・マイム・ヴェサソソ」と歌います。このフレーズこそイザヤ書12章3節にあることばです。「マイム・ヴェサソソ」の発音表記は「マイム・ヴェサーソソ」(מַיִם וְשִׂשׁוֹן רֹמֵם)ですが、この部分は「喜びながら、水を(汲む)」という意味です。なんとこれはメシア王国到来(千年王国)に実現する輝かしい救いの預言です。そんなこととはつゆ知らず、それを歌いながら踊っていたということになります。無知とは恐ろしいものですが、この本当の意味を悟って、今度はイエシュアの再臨による御国の到来を喜んで待ち望みながら、主にある者たちと共に踊りたいものです。

●さてイザヤ書12章は、「小イザヤ書」と言われる1～12章の最後の章です。「小イザヤ書」と言われる所以は、

1～12章の中にイザヤ書全体がコンパクトにまとめられていることにあります。イザヤ書の中に展開する重要な語彙と思想がその中にパッケージ化されているのです。12章も1～6節と実に短いのですが、そこには貴重な宝が隠されています。特に、3節の「あなたがたは喜びながら、救いの泉から水を汲む。」は重要です。「救いの泉」を口語訳では「救いの井戸」と訳していますが、「泉」も「井戸」も同義です。つまり、尽きることのない源泉を意味しています。いつそれが実現されるのでしょうか。それは、「**その日**」です。

1. 「その日」、あなたは(あなたがたは)言う

●預言書で「その日」(新共同訳は「その日には」)とあれば、数年(数百年)先の歴史において起こることもありますが、大方、「終わりの日」、すなわちメシア王国(御国の到来)の時のことを指しています。イザヤ書だけで「その日」というフレーズを検索すると41件もヒットします。その中からいくつか取り上げてみます。たとえば、

①イザヤ7章18節「**その日になると**、【主】はエジプトの川々の果てにいるあのはえ、アッシリヤの地にいるあの蜂に合図される。」

②イザヤ7章20節「**その日**、主はユーフラテス川の向こうで雇ったかみそり、すなわち、アッシリヤの王を使って、頭と足の毛をそり、ひげまでもそり落とす。」

●上記の聖句の「その日」は、それほど遠くない時期にユダの王国が滅ぼされることが語られています。18節にあるエジプト、アッシリヤといえども大国ですが、それらが「はえ」や「蜂」にたとえられて、ユダのどんなところにも入り込んでいくことを意味しています。また、20節では、主なる神がアッシリヤを用いて、ユダの民(男性)の「頭と足の毛をそり、ひげまでもそり落とす」かみそりにたとえられています。このことは次の世代に実現するのです。

③イザヤ11章10節「**その日**、エッセイの根は、国々の民の旗として立ち、国々は彼を求め、彼のいこう所は栄光に輝く。」

④イザヤ11章11節「**その日**、主は再び御手を伸ばし、ご自分の民の残りを買い取られる。残っている者をアッシリヤ、エジプト、パテロス、クシュ、エラム、シヌアル、ハマテ、海の島々から買い取られる。」

●③の「その日」とは、「エッセイの根」、つまりエッセイの子孫から出る王なるメシアは、世界の国々の民の旗として立ち、国々は彼を求めるようになるという預言です。これはまだ実現していません。また④の「その日」は、「主は再び御手を伸ばし、ご自分の民の残りを買い取られる」、つまり離散している神の民イスラエルが神によって帰還することの預言です。今日、この預言は実現しているように見えますが、帰還しているユダヤ人は主を求めてはいません。したがってこの預言はまだ実現しているとは言えません。

●このように、イザヤ書における「その日」というフレーズが出て来る場合には、その多くが「終わりの日」、すなわち、メシア王国の到来(キリスト再臨)の時を指しているのです。今回のイザヤ書12章にも「その日」とい

う同じフレーズが1節と4節にあります。いずれもメシア王国が実現するその時にという意味で使われています。

(1) 主の審判(さばき)

●12章1節「【主】よ。感謝します。あなたは、私を怒られたのに、あなたの怒りは去り、私を慰めてくださいました。」とあります。ここにある「怒られた」ということが神のさばきを意味します。

●イザヤ書における神の怒りは、単なる感情的なものではなく、神の民に対する熱愛に基づくものです。

①イザヤ1章2～3節には神の民に対する神の訴えが記されています。以下の表現の中に、主の心の痛みをより強く感じさせられます。

「子らはわたしが大きくし、育てた。しかし彼らはわたしに逆らった。牛はその飼い主を、ろばは持ち主の飼葉おけを知っている。それなのに、イスラエルは知らない。わたしの民は悟らない。」

②イザヤ書5章1節後半～2節にはこう語られています。

「1b わが愛する者は、よく肥えた山腹に、ぶどう畑を持っていた。

2 彼はそこを掘り起こし、石を取り除き、そこに良いぶどうを植え、その中にやぐらを立て、酒ぶねまでも掘って、甘いぶどうのなるのを待ち望んでいた。ところが、酸いぶどうができてしまった。」

●1節にある「わが愛する者」の「わが」とは預言者イザヤのことで、「愛する者」とは「主」のことです。そしてその(愛する者の)「ぶどう畑」とは神の民イスラエル(ユダの民)のことです。つまり、「わが愛する者」が、ぶどう畑に対する愛の歌を預言者イザヤが歌うという設定となっています。「ぶどう畑」は実にかかかかるようです。そのことを示唆する動詞の語彙が重ねられています(下線の部分)。これはまさにぶどう畑を造る手順の「恩寵用語」です。ところが、主の大いなる期待にもかかわらず「酸いぶどう」ができてしまったのです。「酸いぶどう」と訳されたことばは「酸っぱいぶどう」という意味ではなく、「腐ったぶどう」という意味です。その元になっている動詞の「バーアシュ」(בִּישָׁ)は、「異臭を放つ」という意味です。エジプトに対する神のさばきとして、死んだ魚のためにナイル川の水は臭くて飲めなかったとあります(出7:18)。また、かえるが死んで地は臭くなったともあります(出8:14)。出エジプトした神の民が荒野でマナを神から与えられますが、多く取ったマナは翌日には虫がわいて、悪臭を放ったとあります(出16:20)。このように「酸いぶどう」とは、悪臭を放つぶどうであったということです。「良い」「甘い」「特選」のぶどうがなるのを期待して待っていた主にとって、それはどんなに失望したことでしょう。神の怒りが下されるのは当然です。その怒りがやがてバビロン捕囚という形でもたらされるのです。

●ところが、その神の「怒りが去って、慰めてくださった」ということがその次に来ます。「慰める」ということばはイザヤ書の後半(40章～)の冒頭に出てきます。有名な「慰めよ。慰めよ。わたしの民を」ということばです。イスラエルの歴史を学んでいる者には、このことばはバビロンの捕囚となっていたユダの民に対する神の語りかけであると知っています。しかし、それは本体の型であって、本体は、やがて到来するメシア王国ではじめて実現するのです。

●重要なことは、神の救いと回復の前には、必ず審判(さばき)があるということです。このパターンは神の歴史における変わることはない型なのです。メシア再臨前の七年間の大患難は、神の民イスラエルが反キリストを自

分たちのメシアとして受け入れたことに対する神のさばきです。

(2) 主の救い、回復に対する感謝の歌

「主に感謝します」というその内容は、主が私(ここは個人というよりは集合人格的単数かもしれない)の罪に対して怒られたにもかかわらず、その怒りがおさまり、私は**慰めを与えられた**というものです。もう一つは「主は、わたしのために**救いとなられた**」ということです。いわば、「慰め」は「救い」、あるいは「回復」と同義です。また、4節以降ではそのことを「そのみわざ」「すばらしいこと」と表現しています。

(3) 七つの呼びかけ

- ① 「(主に)感謝せよ」 「ヤーダー」 יָדָהּ
- ② 「(御名を)呼び求めよ」 「カーラー」 קָרָא
- ③ 「～知らせよ」(新共同訳は「告げ知らせよ」) . . . 「ヤーダア」 יָדַעַ
- ④ 「語り告げよ」(新共同訳は「語り告げよ」) . . . 「ザーハル」 זָכַר
- ⑤ 「ほめ歌え」 「ザーマル」 זָמַר
- ⑥ 「大声をあげよ」 「ツァーハル」 צָהַל
- ⑦ 「喜び歌え」 「ラーナン」 רָנַן

※上記の動詞は、詩篇においても重要な礼拝用語ですが、これらの呼びかけは過去の出来事ではなく、これから起る終末の御国の実現における「呼びかけ」であるということです。それゆえ、詩篇を味わうことは「御国の福音」の完成に対するさらなる期待を増し加えさせられることとなります。

2. 救いの泉から「水を汲む」

【新改訳改訂第3版】イザヤ書 12 章 3 節「**あなたがたは喜びながら、救いの泉から水を汲む。**」

●「水を汲む」の「汲む」と訳された動詞は「シャーアヴ」(שָׁאֵב)で、井戸から水を「汲み上げる」ことを意味します。この動詞は旧約で 19 回使われています。創世記 24 章ではそれが 8 回使われています。24 章はアブラハムの最年長のしもべであったエリエゼルが、アブラハムの生まれ故郷にイサクの嫁を探しに行くストーリーが記されています。彼が何を基準にしてイサクにふさわしい妻を捜そうとしたかが記されています。イサクにふさわしい妻と出会うことができるようにエリエゼルは神に祈ります。そのとき彼は不思議なことを言います。イサクにふさわしい妻とは、水を汲みに出て来る娘たちの中で、彼が「どうかあなたの水がめを傾けて私に飲ませてください。」と言い、その娘が「お飲みください。私はあなたのらくだにも水を飲ませましょう。」と言ったなら、その娘こそ、イサクのために主が定めておられる妻だとしたことです。この条件がなぜイサクにふさわしい妻なのでしょう。「イサクのために主が定めておられる妻だ」と確信できる条件が、自分にも、らくだにも水を飲ませてくれる娘なのです。あとはどうでも良いのでしょうか。

●アブラハムのしもべエリエゼルが長旅のために用意したらくだはなんと 10 頭でした。らくだは水を 80～130

リットルを一気に飲むことができるそうです。そんならくだが 10 頭もいて、それに水を飲ませるとすればどれだけの水を汲まなければならないか。考えただけでも大変なことです。それだけの水を井戸から汲み上げるということは、細腕の娘では対応できません。つまり、かなりの生活力をもった娘でなければできません。そんな娘が水がめを肩に載せてエリエゼルの前に現われたのでした。そして、彼女はエリエゼルに水を飲ませただけでなく、全部のらくだのために水を汲んだと記されています。この娘こそイサクの妻となるリベカです。聖書はその娘について「非常に美しく、処女で、・・・」とありますので、とてもスリムなイメージを(私は)抱きやすいのですが、リベカはなんと小言一つ言わずに、10 頭のらくだに水を飲ませるほどの娘だったのです。

●ちなみに、箴言 31 章 10 節に「しっかりした妻をだれが見つけることができよう。」とあります。かなりの生活力があるように描かれていますが、「しっかりした妻」のヘブル語は「エーシェット・ハイル」(אִשֶּׁת־חַיִל)で「たくましい妻」という意味です。「しっかり」、あるいは「有能な」という訳は意識です。17 節にも「腰に帯を強く引き締め、勇ましく腕をふるう」とありますから、その体つきは、水がめを運んだり、石臼をひいたりできるほどの鍛えられた太い腕をイメージさせます。箴言の私訳と注解をしている松田明三郎氏は、この箇所だけは比喩的表現で、文字通り解釈してはならないとあえて記しています。ではここでいうところの女性の「たくましさ」とはどのように解釈すればよいのか、それについては触れていません。

●いずれにしても、「水を汲む」という労働は大変なものであったということです。しかし、そんな過酷な労働もメシア王国においては、「喜びながら救いの井戸から水を汲む」ようになるのです。もっとも、ここでの「水を汲む」というのは、実際のことではなく霊的な意味において理解する必要があります。ヨハネの福音書 4 章に、ヤコブの深い井戸に水を汲みに来たサマリヤの女が登場します。その女にイエシュアは「わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渴くことはありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちの水がわき出ます。」(4:15)と言ったとき、サマリヤの女はすかさず「その水を私に下さい。」と言いました。その求めた誤解の背景には、日々の水汲みの労働がいかに大変なことであったかを示唆しています。

●水を「汲む」の「シャーアヴ」(שָׂאֵב)の三つの文字には、神である父(אֵל)を熱心に尋ね求めるという意味が隠されています。また「シン」(שִׁן)と「ベート」(בֵּית)の二つの文字からなる親語根を持つ動詞だと考えるならば、その親語根に子語根(ה, ו, י, א, נ)を付け加えることで、その周辺に以下のような親戚関係にあたる語彙が浮かび上がってきます。

- ①「シャーヴァー」(שָׂבָה)・・・虜にされる、捕らわれる。
- ②「シューヴ」(שׁוּב)・・・返る、帰る。
- ③「ヤーシャヴ」(יָשַׁב)・・・住む、とどまる。
- ④「ナーシャヴ」(נָשַׁב)・・・風が吹く(氷を解かすような力)。
- ⑤「シャーアヴ」(שָׂאֵב)・・・(水を)汲む。

●上記の語彙から、以下のようなストーリーを組み立てることができます。

「とりこにされ、捕らわれていた」(「シャーヴァー」 שָׂבָה)者たちが、神の主権的な聖霊の力が「吹く」(「ナ

ーシャヴ」**נִשְׂבַּח**)ことによって解放され、はじめて彼らは主のもとに「帰る」(「シューヴ」**שׁוּב**)ことができる。その者たちはメシアの王的支配の下で祝福のうちに「住む」(「ヤーシャヴ」**יָשַׁב**)ことが許され、さらには、喜びながら、救いの井戸から尽きることのない永遠のいのちの水を「汲む」(「シャーアヴ」**שָׁאֵב**)ことができるようになる。

●ここでの「永遠のいのちの水を汲む」とは、「主を知る」ことを意味します。

「その日」には、【主】を知ることが、海をおおう水のように、地を満たすようになるのです(イザヤ 11:9)。

3. 仮庵の祭りに歌われる感謝の歌

●ユダヤ暦の第七の月の 15 日から七日間にわたる主の「仮庵の祭り」では、「水取りの儀式」がシロアムの池で行なわれます。大祭司がきれいな衣を着て金の杓子をもってシロアムの池から水を汲み、それを神殿にまで運びます。その時に、イザヤ書 12 章を歌いながら、神殿までその水を運ぶ行列がなされるのです。今日においても歌われているようです。

●ユダヤ人は七日間、仮庵に住まなければならないことがトーラーの中に記されています。この時の様子について記している本から引用したいと思います。その本は「聖書の世界が見える」(植物編)で、著者は韓国のリュ・モーセという方です。イスラエルの宣教師であると同時に、漢方医学、現代医学の博士。翻訳は上田あつ子、出版は「ツラノ書院」(2011.6 発行)です。以下は、その本からの引用です(249～253 頁)。少々長い引用ですが、とても重要な事柄なので引用させていただきます。

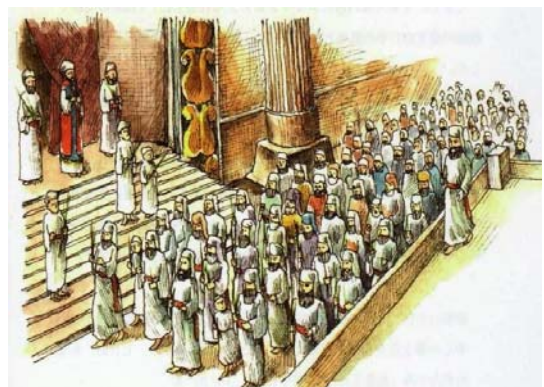


仮庵の祭りの行事のハイライトは、神殿の祭司の庭にある祭壇の南西側に柳の木を立て、毎日、祭壇の周りを一周ずつ回ります。ユダヤ人たちはエルサレムの西側にある「モツア」という川縁から、毎日新しい柳の木を折って来ました。

柳の木の枝は折られた瞬間に気がなくなり、たった1日でも枯れてしまおうからです。

**最初の日、あなたがたは自分たちのために、美しい木の実、なつめやしの葉と茂り合った木の太枝、
また川縁の柳を取り、七日間、あなたがたの神、【主】の前で喜ぶ。(レビ 23:40)**

このように 6 日間新しい柳の木の枝を立てておき、仮庵の祭りの最後の日には、特別な行事をしました。・・・本来、祭壇がある神殿の祭司の庭は、祭司以外には誰も入ることができない聖域ですが、しかし、この日(最後の日)だけは例外で、すべてのイスラエルの巡礼者たちに(女性も子どもたちにも)開放され



ました。普段は祭壇の周囲を 1 周しますが、仮庵の祭りの最後の日には、祭壇の周囲を 7 周回りました。この時、巡礼者たちは祭壇の周囲を回りながら、詩篇の祈りを切にささげました。イスラエルの人々は、水がないため、渴いてしおれて行く柳の木の枝を横に、「主よ。どうか私たちを救ってください。」(詩篇 118:25)と叫びながら祈りをささげたのです。・・・

荒野の民イスラエルにとって、水はいのちそのものであり、創造主の恵みを象徴するものです。水がなく、枯れてしまう柳の木のように、創造主の特別な恵みがなくては枯れて、廃れてしまうしかないイスラエルを救ってくださいという切なる願いをささげたのです。

「どうぞ、救ってください。」とはヘブル語で「ホサナ」(「ホーシーアー・ナー」 הוֹשִׁיעָה נָא)です。・・・仮庵の祭りに使われる柳の木の別称はホサナです。ホサナは水を求めて叫び声を上げる柳の木を指します。

・・・

イエスは仮庵の祭りの最後の日、神殿の祭司の庭に出て行かれました。この時、ユダヤ人たちは、創造主の恵みを切に求めていましたが、すぐ横に立っておられるイエスを知ることはありませんでした。何と皮肉なことでしょう。・・・水を失い枯れ行く柳の木と、救いを切に求め、ホサナを叫ぶユダヤ人たちに、ご自分がメシアであることを叫んでおられたのです。

「だれでも渴いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる。」(ヨハネ 7:37~38)

最後に

●「あなたがたは喜びながら、救いの泉から水を汲む。」(イザヤ 12:3)とは、尽きることのない泉から流れ出る、救いの喜びに満たされることの預言です。しかしその救いの喜びとは、私たちが労苦して「汲む」ことではなく、神の恩寵として、腹の底から湧き上り、流れ出てくる生ける水であり、主を知ることの喜びなのです。

「マイ(ム)・マイ(ム)・マイ(ム)・マイム・ヴェサソン」と歌い踊りながら、メシア王国の到来を待ち望みたいと思います。

2014. 8.17